



元気たくは地域の宝

元気高齢者の暮らしに学ぶ生活支援体制整備事業のあり方

沖縄県生活支援コーディネーター 試行的派遣業務報告書



いまこそ、地域支え合いを考えよう！

「ゆんたく」の価値を見直す

人口減少・少子高齢化社会を迎え、国は介護が必要になっても暮らし続けられる地域づくりを目指して、「地域包括ケア」の実現を掲げています。

これまでの介護予防は、個人の自助を前提に、共助、公助を整備するという考えでしたが、これからは地域のつながり・互助を基盤にすることが重要です。一人で黙々とウォーキングするよりも、友だちとおしゃべりをしながら歩くほうが楽しく、励まし合うことで長続きします。互助を支援することは、自助の強化につながるのです。



ゆんたくには、孤立防止や介護予防の効果が！

年齢を重ねても、住み慣れた地域で暮らし続けたいと思うとき、病気や障害などで不自由となった生活を、制度やサービスを利用して補うことは大切です。でも、それだけではなく、気のおけない友人との何気ないおしゃべり、伝統行事を守り続けることなど、人と人の関わりもまた、その人の暮らしを支えています。

近所仲間とお茶飲み、おすそ分け、車の乗り合い、見守り、気にかけていは、あまりにも自然な形であるため、そのたいせつさが見過ごされがちですが、それが暮らしのなかの小さな支え合いであり、豊かな人間関係を物語っているものと言えます。

沖縄には、「ゆんたく」という宝物の文化があります。集っておしゃべりを楽しむ場は、孤立防止や介護予防の効果があり、居場所づくり、情報交換の場、ゆるやかな見守りにもつながっています。

暮らしのなかにある日常のつながりは、このように意味づけて意識化することによって、地域の支え合いの活動(資源)として位置づけることができます。このような地域の営みをつないでいくと、結果的に支え合いのネットワークができて生活を支援する体制になります。その役割を果たすのが、2015年の介護保険改正で創設された、生活支援コーディネーター(地域支え合い推進員)と協議体です。

地域のつながりから見る支え合い

支え合いの地域づくりを、一本の木にたとえたものが、「地域づくりの木」です(図)。木の幹は、地域支え合い活動(インフォーマルな社会資源)であり、その上に繋がる枝葉は制度にもとづくサービス(フォーマルな社会資源)です。さらに重要なのは、外からは見えにくい根っこにあたる部分、つまり近所づき合いや仲間同士のつき合いなどの自然発生的な日々の営み(ナチュラな社会資源)です。

枝葉の制度サービスは、地域の支え合い活動の幹に支えられ、幹の地域の支え合い活動は、根っここの近所づき合いが支えています。この根っこにある人と人とのつながりを大事に育むことが、豊かな地域づくりにつながるのです。

ゆんたくをはじめ、地域にはすでに多くのつながりや支え合いが存在しています。住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けるために必要なのは、まずは地域の住みにくさや課題を探すのではなく、すでにある生活の知恵や工夫を意義あるものとして地域づくりに活かしていく視点です。地域の宝物を知ること、見つけ出すことから、誰もが住みよい地域づくりの第一歩が始まります。

! 支援のプロは、制度にもとづくサービスの提供が中心。地域のプロと連携することで、地域包括ケアシステムが目指す、支援や介護が必要になっても地域で暮らし続けられるサービスを提供できる。

! つなぐプロ：地域のプロと支援のプロをつなぎ、そのほかの専門職や制度、地域と人をつなぎ、住民同士をつなぐなど、多様なネットワークを育てる人。

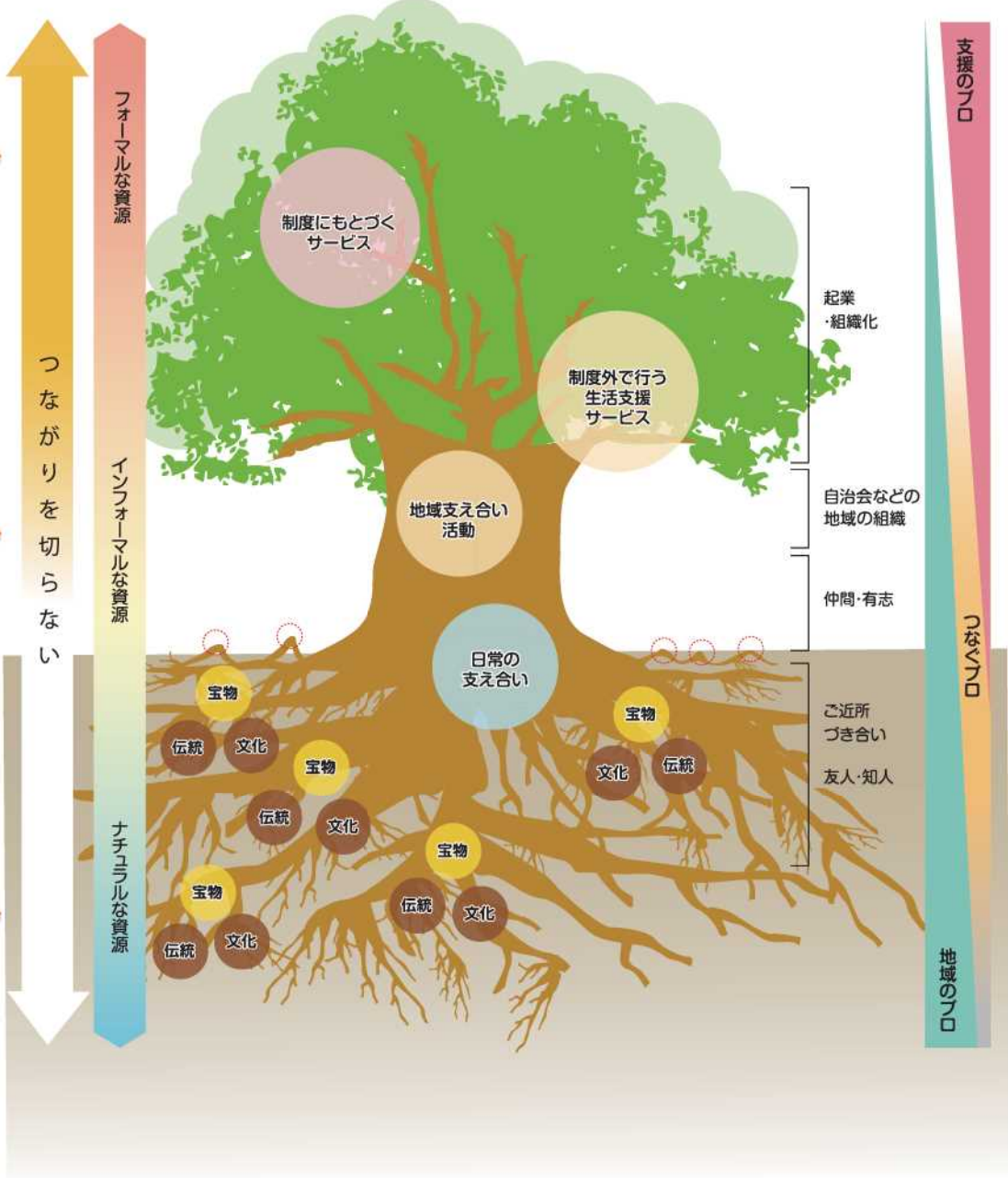
! 地域のプロ：地域に暮らす住民はみんな地域のプロといえるが、人と人のつながりなど人間関係やどこに何があるということをよく知っている、いわゆる地域の世話上手な人や伝統などに詳しい物知りな人。

地域づくりの木

! **フォーマルな資源**とは、制度にもとづくサービスのこと。

! **インフォーマルな資源**とは、制度外で行う生活支援サービスや地域の支え合いなどがもとなっている活動のこと。

! **ナチュラルな資源**とは、近所づき合いや仲間同士のつき合いなど、日常の暮らしの中から生まれる自然発生的な外からは見えにくい支え合いのこと。



もくじ

いまこそ、地域支え合いを考えよう！—ゆんたくの価値を見直す—	2
「お宝探し」の地域づくり 生活支援コーディネーター試行的派遣業務とは？	4
対象町村の概要	5
地域のお宝事例（国頭村・渡名喜村・多良間村・与那国町）	6
「お宝探し」の作法と効能	22
「お宝探し」の評価と感想	23

「お宝探し」の地域づくり

生活支援コーディネーター 試行的派遣業務とは？



国頭村辺野喜区の共同店で高齢者の話を聞く、
生活支援コーディネーター試行的派遣業務の担当者(左端)

地域づくりに 王道はない？

地域は、それぞれ固有の歴史的背景や生活文化を母体に、そのときどきの、そこにしかない住民同士の関係性を生み出します。

地域をそのように捉えるなら、高齢でも暮らしやすい地域づくりの指針は、一律的に示されるモデルやメニューのようなものだけでなく、現にそこに住む人びとの実際の暮らしぶりを生かすものとすべきでしょう。この「暮らしぶり」は、従来のアンケートやアセスメントなどの手法ではうかがい知れない、プライベートな生活の場と、そこでの行動を意味します。

たとえば、地域で介護予防を目的としたサロン活動が行われていないとしても、高齢者は実に多様な「ゆんたく」の場を持ち、それがとても効果的な介護予防や孤立防止、見守りになっていることがあります。

そうした生活文化をたいせつに守り、伝えていくことも重要な地域づくりです。

不足を補うサロンを立ち上げるだけでなく、いまできている「ゆんたく」を知り、それを生かすことを考えるわけです。

暮らしぶりから、生活支援体制整備

事業の方向性を検討する——生活支援コーディネーターには、そうした視座も求められます。前頁の「地域づくりの木」に即して言えば、コーディネーターは、根を知らなければなりません。

根が充実していれば、幹や枝葉も健全に発展します。

根がやせていけば生育を促し、良好ならその状態を保つよう心がけます。

根からスタートする地域づくりは、恐らく千差万別であり、王道はありません。生活支援コーディネーターが住民と向き合うなかで方向性や具体策を見出していくほかないのです。

4町村で お宝探しを実施

根を構成する諸要素(たとえば生活文化としてのゆんたく)を、ここでは「地域のお宝」と呼びます。

土の中に埋もれている根を見つけ、お宝として評価する——いわばお宝探しますが、実はこれが、生活支援コーディネーター試行的派遣業務の目的であり、内容です。

具体的には、たとえば80、90歳代になっても元気に自宅で生活している人たちの暮らしぶりを取材し、そこに隠された介護予防的な要素や、近所付き合いのなかにある見守りや支え合

いを明らかにしました。

同業務は、特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター(＝CLC)、本部・宮城県仙台市)が、沖縄県から受託する県生活支援コーディネーター養成研修等事業の一環として実施しました。

業務の対象となった自治体は、平成28年度が国頭村、29年度が渡名喜村、30年度が多良間村と与那国町です。

各町村でのお宝探しは、CLC職員がそれぞれの行政、社会福祉協議会、地域包括支援センターの生活支援体制整備担当者や生活支援コーディネーターらと共同で3〜4日程度かけて行いました。さらにその取材成果をスライド(パワーポイント)にまとめ、発表会を開いて関係者に報告しています。業務日数は、事前の打ち合わせや予備調査、スライド制作、発表会まで含めらる〜7日程度。

本冊子では、各町村で取材した「お宝」事例から4つずつを選び、計16件紹介します。地域づくりの参考資料としてももらえれば幸いです。

各町村の記事は業務実施時期順に掲載。登場人物の年齢は、原則として業務実施当時。ただし国頭村は、再取材を行った平成30年10月時点。

対象町村の概要および業務実施時期

【国頭村（くにがみそん）】

沖縄本島の最北端に位置。面積は約1.9万ヘクタールで県内5番目の規模。その8割を森林が占め、ヤンバルクイナなど貴重な動物の宝庫として知られる。村域は20集落、7小学校区、1中学校区で構成。役場のある辺土名地区に中心市街地を形成。集落住民が出資、運営する「共同店」は、同村の奥地区が発祥の地。人口4744人、2330世帯、高齢化率33.8%（平成30年12月31日時点）

◎業務期間：平成29年1月31日～2月3日



国頭村（伊地付近から辺土名方向を望む）

【渡名喜村（となきそん）】

沖縄本島から北西約60kmに位置。渡名喜島と入砂島の2島で構成し、主島の渡名喜島は周囲約12.5km、面積約387ヘクタール。県内で最も面積・人口規模が小さい。集落は1か所にまとまり、西、東、南の3地区に大別される。伝統的な赤瓦屋根の家屋が多く残り、島全体が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定。人口378人、世帯数220世帯、高齢化率42.7%（同）



西森園地展望台からの眺望

◎業務期間：平成30年1月21日～26日

【多良間村（たらまそん）】

沖縄本島から南西約350km、宮古島と石垣島のほぼ中間にあり、多良間島と水納島の2島からなる。主島の多良間島は周囲約26km。集落はほぼ1か所にまとまり8地区で構成。小、中学校は各1校。集落外にはサトウキビ畑が広がる。旧暦8月8日の伝統行事「八月踊り」は、国の重要無形民俗文化財。人口1112人、523世帯、高齢化率29.0%（同）



八重山遠見展望台からの眺望

◎業務期間：平成30年11月25～30日

【与那国町（よなぐにちやう）】

沖縄本島から南西約509kmの与那国島（周囲約27km）一島で町を構成。日本最西端に位置する。町域は祖納、久部良、比川の3集落に分かれ、小学校区もこの3つ。中学校は祖納、西久部良の2つ。近年、島特産の長命草（ホタンボウフウ）を原料に多様な健康食品が開発され、話題を呼んでいる。人口1716人、950世帯、高齢化率21.0%（同）



「ティンダバナ」から祖納集落を望む

◎業務期間：平成30年12月9日～14日

多良間村

与那国町

八重山列島

宮古列島



「何もしていないのは苦しい」と話す平識徳子さん



安波共同店で買いもの



自宅近くの畑。野菜やイモ類を育てる。

働かないと気が済まない

平識 徳子さん(92歳) (国頭村)

「遊ぶ(働かずにいる)のが一番つらい」

こう語るのは平識徳子さん(92歳)。国頭村安波区で、夫を亡くして以来20年近くひとり暮らしです。

元農家。かつては広大な農地でパイナップル栽培などを手がけていました。

生業としての農業は引退しましたが、自家用の畑作はずっと続いています。ほぼ毎日シルバーカーを押して自宅近くの畑へ。力いっぱい鍬(くわ)を振るって土を起こし、丹精込めて野菜やイモ類を育てます。自分だけでは食べきれないほど収穫があり、周囲におすそ分けしています。

朝の涼しい時間帯に畑仕事を済ませ、そのあとは家の掃除や片付けをしたり、安波共同店へ買い物ものだけ出かけた。共同店では買い物だけでなく、スタッフやほかの客とゆんたくをします。

共同店のスタッフ、奥原陽子さん(43歳)によると、徳子さんに限らず、「店に来る人は皆しばらくの間おしゃべりをしていく。だから地区のいろんな情報が集まる。どの家のおいしい、おばあちゃんの体調はどんな感じか

とか、だいたいわかる。」

地区の住民は、高齢者の暮らしを何気なく見守り、「一日でも姿を見かけないと必ず誰かが確かめに行く」(奥原さん)。そして共同店のゆんたくで情報共有。店は交流サロンであり、見守りの拠点でもあります。

平識さんは数年前から視力が低下し、明るい場所でもうにか目の前のものを判別できる程度です。それでも家事全般をこなし、畑仕事に精を出し、買い物も自分でします。週1度のデイサービスで、得意の歌を披露するのも楽しみにしています。

このような活発な高齢者は、安波では珍しくないそうです。区の会計担当役員、玉城てるみさん(52歳)は、「安波のおばあは休むことを知らない。毎日ちよつとでも体を動かさないと気が済まない。だから年を取っても元氣。特に徳子さんはすごい。お手本のような人。私たちも見習わないといけない」と話します。

暮らしそのものが介護予防。玉城さんが指摘するように、これが理想ではないでしょうか。



畑への2キロほどの道を自転車で



与那共同店で買いもの



ほとんど毎日畑仕事

私にとっては畑が学校

おなが まいし
翁長 昌子さん(91歳)〈国頭村〉

まだ暗いうちに起きて、神さまと仏さまにお祈りを捧げ、朝食をいただき、掃除や洗濯を済ませて畑へ向かう——これが翁長昌子さん(91歳)の日課。国頭村与那区で、ひとり暮らしを送っています。

畑までは約2キロの道のり。翁長さんは自転車を通います。途中、共同店で飲み物や菓子を購入。畑仕事に3時間ほど費やすため、水分補給などの準備は欠かせません。

農作業に汗を流して、近くの畑に友人の姿があれば、一緒に休憩してゆんたく。「私にとっては畑が学校」と翁長さん。「毎日通うし、クラスメート(友人)にも会える。頭も使う、体も動かす。ゆんたくすれば、新しい知識も増えるわ」。

収穫は一人では食べきれないほどあり、ほとんどを友人や親類にあげています。質の高い野菜ができるので、青果店を営む孫が引き取って売ることがも。「野菜づくりは自分で食べるためじゃない」と言います。自分にできること、得意なことを生かして周囲から「ありがたい」と言われ、ときには孫の商売の役にも立つ……それが楽しみ、生きる張り合い。

畑から自宅に戻り、ひと休みしたあ

とは、家事などをして過ごします。

そして午後7時頃、再び外出。足腰を痛めて外出がままならないひとり暮らしの友人の元へ、ゆんたくしに行くのです。夜のゆんたくは仲間3〜4人。皆90歳前後です。9時頃までのひとときをともに楽しみ、お互いを見守っています。

与那共同店の主任、神山加代子さん(57歳)に、地区の高齢者の暮らしについて聞きました。

神山さんによると、畑の行き帰りに店に立ち寄る人は多いそうです。「今から畑に行くよ、店でお菓子を買っていくね」と、携帯電話で連絡を取り合うおばあたちもいる。ゆんたくしに畑に通っているみたい(神山さん)。

店もゆんたくの場。買いものの用事がなくても、気軽に来て神山さんやほかの客とおしゃべりできます。楽しみながら生活情報を交換し、困りごとがあれば、まず店に相談。内容に応じて神山さんが、区長や民生委員らにつなぎます。

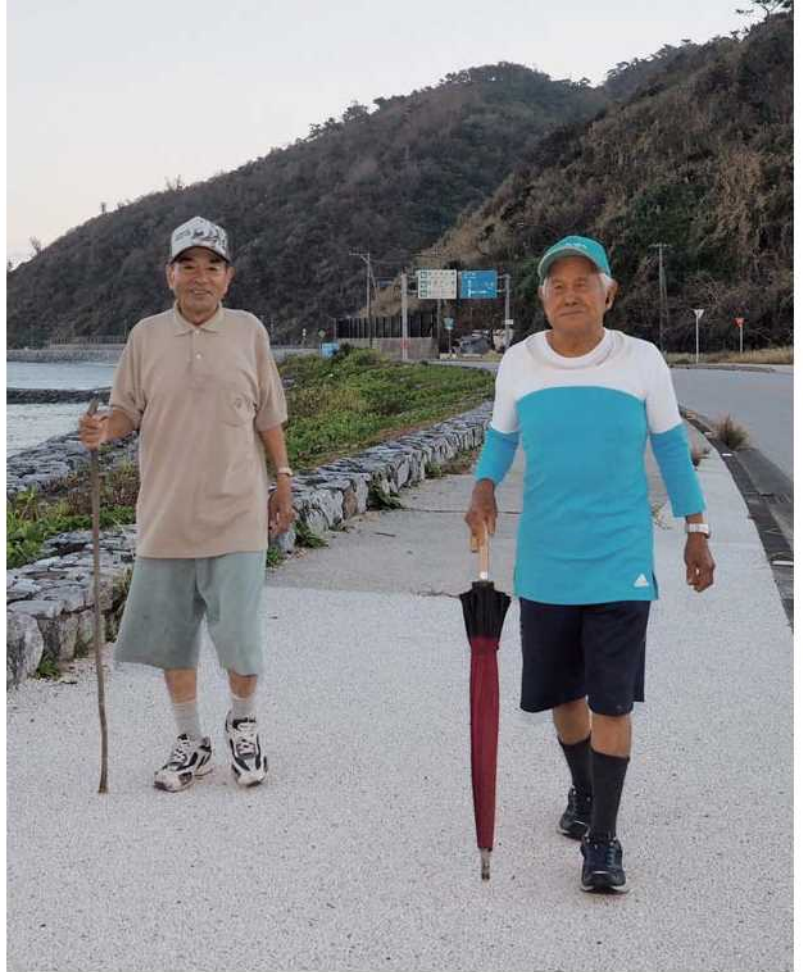
畑とゆんたくと共同店が、翁長さんたちの元気を生み出し、地域での暮らしを支えています。



バス停でのゆんたく。通り掛かりの人もしばしば加わる



歩きながらひとり暮らし高齢者に声掛け



ウォーキング中の平良玉清さん(左)と宮城嘉政さん

ゆんたくウォークで見守りも

朝5時45分。平良玉清さん(85歳)が、自宅近くにあるカー(湧水井)の清掃をします。

国頭村与那区には、神事にも用いられる集落中心部のアナガー(穴川)も含め、計6か所のカーがあります。そのうちの二つを平良さんが毎日、落ち葉などを払ってきれいにしています。

10分ほどで清掃を終えると、平良さんはそのままウォーキングに出かけます。

集落道をしばらく歩いて海沿いの国道58号へ抜け、「与那」のバス停で小休止。

6時20分。国道を反対方向から歩いてくる人がいます。宮城嘉政さん(84歳)です。

平良さんと宮城さんはバス停のベンチに腰を下ろし、しばしゆんたくに興じます。

同じ時間帯に国道沿いをウォーキングする人はほかにもいて、バス停に3〜4人集まることも。

二人は15分ほどゆんたくを切り上げ、一緒に集落へ戻ります。このとき、ひとり暮らし高齢者に声掛けをしていくのです。

たいら たまきよ

平良 玉清さん(85歳)

みやぎ かせい

宮城 嘉政さん(84歳)

(国頭村)

平良さんが清掃をするカーの辺りが終点。そこで道ばたのブロック塀に腰掛け、再びゆんたくします。

7時ちょうど。解散となります。

台風などでよほど天気が荒れない限り、ウォーキングを欠かすことはありません。「一日でも休むと、なんだか体がだるくなる」(平良さん)。

用事があつて歩けないときは、前日のうちに「あすは休む」と伝えておきます。そうしないと「相手に余計な心配をかけてしまう」(平良さん)。コース途中の声掛けも含め、ウォーキングは仲間同士の見守り活動でもあるのです。

宮城さんは20年ほど前、ガンの手術を受けました。退院のとき医師から体力づくりを勧められたのが、歩き始めたきっかけ。宮城さんの歩く様子を、カーの清掃をしていた平良さんが見て「自分も」と思い立ったそうです。

どちらも奥さんと二人暮らし。宮城さんは農家、平良さん元公務員で、退職後に農業を始めました。ともにミカン栽培を手がけています。畑仕事と早朝のゆんたくウォークが二気味の秘けつ。二人は口をそろえ、明るい笑顔を浮かべます。



自宅でゆんたく(左から5人目が東恩納ナツさん)



デイサービスでもゆんたく(右)



辺野喜共同店でゆんたく(左から2人目)

心のリハビリ家でも店でも

ひがしおんな
東恩納 ナツさん(87歳)〈国頭村〉

「ゆんたくしている脚の痛いのを忘れる」

東恩納ナツさん(87歳)は顔をほころばせます。

「薬より効く。気持ちも和らいで、心のリハビリね」

国頭村辺野喜区べのきの自宅です。ひとり暮らしです。膝に痛みがあって、歩行が少し不自由。出歩く際は、杖かシルバーカー押し車を使っています。

天気の良い日、庭に出ていると、近所の友人が集まってきます。

80〜90歳代のおばあちが、あれよあれよという間に3〜4人。

居心地のいい日陰か家のなかに入って、皆でゆんたくりおしゃべり。

ときには「おいしいケーキがあるからコーヒータイムしよう」などと誘ったり、誘われたり。集まる場所はない、東恩納さんの家。

「ナツさんのところに来ると元気になる。体もよくなる」とおばあちが話します。

東恩納さんの家に集まるのは、第一にはその温厚な人柄を皆が慕っているためですが、ひとり暮らしで家族への気兼ねがないことや、膝を痛めている東恩納さんの負担を増やさ

ないための気遣いもあるようです。

東恩納さんからすれば、あまり歩けない代わりに、友人たちを積極的に家へ招くことで、自分と友人たちを元気づける「健康サロン」をつくっている、とも言えるでしょう。

「店でもゆんたくするよ」

家から歩いて5分ほどのところに辺野喜共同店があります。店の前と売り場にそれぞれテーブルとイスが置かれ、買いものの用があってもなくても、よく人が集まっています。

店長の安田常子さん(68歳)は、「ものを売り買ひするだけでなく、ゆんたくをする場所でもある」と語り、交流の場としての店の役割を強調します。

東恩納さんが買いものに行くのは週1〜2回。このほか、毎週月曜に近くのデイサービスに通っています。どちらもゆんたくが一番の楽しみ。自宅では気の合う友人たちと集い、共同店やデイサービスでは地域のさまざまなお人と交流します。

「とってもしっかりゆんたくは生きがい」
高齢になってもひとり暮らしになっても、自宅で生活し続ける力は、案外、日常のちよっとしたゆんたくによって育まれています。



漁協脇の「男の居場所」。港を眺めながらゆんたく



毎日7~8人集まる



渡名喜漁港

港が見える男の居場所

漁協事務所（渡名喜村）

男性だけの「ゆんたく場」が、渡名喜村の漁港近くにあります。

村漁業協同組合の事務所の軒下に、ベンチの置かれたちよつとした休憩スペースがあつて、ここに60〜80歳代の男性が毎日7、8人集まるのです。

午前9時ごろから11時半ごろまでの2時間あまり、男たちはベンチに腰を下ろし、港を眺めながら、ゆんたくして過ごします。

世間話に興じ、生活情報を交換し、漁から戻るウミンチュ（漁師）がいれば、海の様子や水揚げの成果を尋ねたりも。漁協前の道を通り掛かる人たちともよく言葉を交します。

天気の良い日は、事務所内の会議室で、港の代わりにテレビを眺めつつ、ゆんたくしています。

「ほとんど毎日来ているよ。私もウミンチュだからね」と語るのは78歳の男性。長く漁師をしてきましたが、数年前に脚を痛めてから漁に出るのを控えています。「ここに来れば仲間にあえる。それが楽しみ。こういう場所があるのはありがたいよ」。ひとり暮らしですが、「さびしさは感じない」と言います。正午前に家に帰り、

昼食を取って、午後は畑仕事などをしていきます。

同じくほぼ毎日来るといふ84歳の男性は、「ここでゆんたくすると元気になる。こうして仲間と楽しく過ごせば、年を取っても若く見えるぞー」と言つて笑います。

毎日のように来る仲間が姿を見せないと、誰かが電話をかけたたり、家を訪ねて様子をうかがいます。異変があれば、すぐに気づいて近くの診療所に連れて行つたり、役場に連絡することもできます。見守りと支え合いの場でもあるのです。

これについて漁協職員の一人に感想を求めると、「そんなふうに考えたことはなかった」と目を丸くする一方、「言われてみれば、確かにお互いの見守りに役立つし、人と会って話すことで認知症の予防にもなるかもしれない」と語り、このゆんたく場を見直したようでした。

たとえ漁に出られなくなつても、漁協の組合員であり続け、誇りあるウミンチュとして、仲間同士で助け合つて暮らしています。



フェリーターミナル内の店舗



接客対応もいきいきと



ちんすこう製造の休憩時間に仲間とゆんたく

人と島、ともに元気に

生活改善グループ〈渡名喜村〉

渡名喜島の表玄関・フェリーターミナル。

フェリーが発着する午前中、売店には島の特産品を使った焼き菓子やゼリー、漬け物などがずらりと並び、島を離れる人たちが「お土産に」と次々買い求めます。

これらを製造・販売するのは、渡名喜村生活改善グループ。メンバーは70歳代の女性4人です。

フェリーが悪天候などで欠航しない限り、毎日店を開けます。午後は、村の農水産物加工所で商品の製造作業をしています。

代表の比嘉米子さん(70歳)は、「こつやつて働くことで、生活に張り合いが持てる」と言います。

売り上げの多い・少ないは「この次」「たとえほんのちよつぱりでも、年金以外に自分で稼いだお金があるのが、とてもうれしい」と比嘉さんたちは口をそろえます。商品を買った人たちからの「おいしかった」の声も、大きな励みです。

「自分たちができることをして、島の観光や経済に多少なりとも役立つている、そう思えるだけでも幸せ。仲間と一緒に作業したり、休憩時間に

おしゃべりするのもしずごく楽しい。グループの活動があるから元気でいられる」と比嘉さん)

メンバーはほぼ毎日連絡を取り合い、ターミナルか加工所で顔を合わせます。仕事とその合間のゆんたくで、お互いの体調の良し悪しや暮らしの様子も何となくわかるそうです。具合が悪い、困りごとを抱えていると見れば、ためらうことなく手を差し伸べます。

グループは昭和37年(1962年)、島の女性たちが自主的に立ち上げました。当初は数十人規模で若手も多く、衣食住全般の改善運動を展開。島の人口が減って高齢化が進むにつれ、メンバーも徐々に少なくなり、現在は食の分野に限って活動しています。

「仲間同士で支え合って、できる限り長く続けたい」と比嘉さん。

規模が小さくなくても、グループの活動がメンバーの健康と生きがい、支え合いを生み出し、島の経済に貢献しています。

人と島を元気にする、とても貴重な活動なのです。



休憩時間にゆんたく(環境保全・美化推進事業)



70歳代の人たちが活躍
(環境保全・美化推進事業)



小さな漂着物も丹念に拾う
(海岸・海浜清掃業務)



一息ついて仲間とゆんたく
(海岸・海浜清掃業務)

生 きが い 仕 事 で 一 石 四 鳥

環境保全・美化推進事業ほか〈渡名喜村〉

必ずしも高齢者向けでなくとも、結果的に高齢世代の多く集まる職場があります。渡名喜島にもいくつか見られますが、ここでは村役場が実施する二つの事業を紹介します。

一つは、環境保全・美化推進事業。島の自然と人の暮らしが織りなす風景の豊かさ、美しさを守るために、集落内や観光スポットの草刈りや清掃、さらには外来植物の駆除と在来種の保護も行います。

作業員は、年度ごとに村の臨時職員として採用され、年間をとおして月13日程度働き、8万円ほどの月収を得ます。平成29年度は20〜70歳代の男女約30人が従事しました。

実は、作業員のほとんどが60歳以上。ちなみに29年度の最高齢は、30年1月時点で78歳でした。

空き地の除草作業をしていた75歳の女性に、働きがいなどを聞いてみました。

「この仕事をするとう島がきれいになるでしょう。私も体を動かして健康になる、お金も稼げる、友だちとゆんたくもできる。いいことづくめですよ」

もう一つは、海岸・海浜清掃業務。

島の海岸線で漂着物の回収をする仕事で、10〜2月の期間中、計20〜25回程度行います。

こちらの作業員も、村が毎年度募集、採用する臨時職員です。日給は6500円で月3万円ほどの収入になります。29年度は50〜80歳代の男性8人が従事。そのうちの一人、78歳の男性は、次のように語っています。

「仕事は結構きついけど、みんなで回結して一生懸命やってる。いい運動だよ。健康を保ってほけ防止になつて、仲間とゆんたくできて、小遣いも稼げる。そして観光客にきれいな島を見てもらえる。「一石四鳥ね」

同じような話は、ほかの人たちからも聞かれました。

高齢者の生活支援や介護予防を目的とした事業ではありません。しかし、そのような効果があることは、働いている人たちの「コメント」からわかります。

高齢者がお金を稼いで元気になり、地域にも貢献する「究極の介護予防サロン」です。